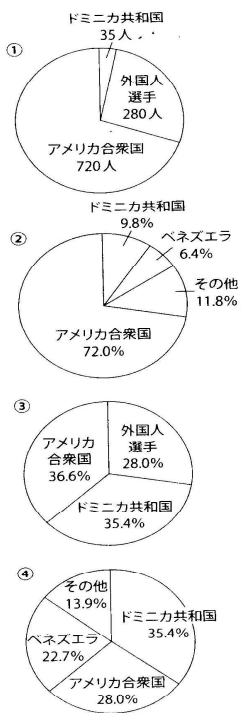




AI (人工知能) が人間を超える日の前に… ～AI vs. 教科書が読めない子どもたちとの対決～

4月1日(日)の夜9時前から、TBSで『林先生が驚く初耳学』のスペシャル番組が放映されました。この番組の中に「初耳、白熱教室東大新1年生編」というコーナーがあり、今年めでたく東大に合格した25名の新入生に対し、林修先生が講義を行う内容でした。講義テーマは、「AIによって人間が仕事を奪われないために」。東大生に、読解力を問う抜き打ちテストを事前に行い、その結果が発表されました。いくつかの問題の中で、東大生でも7割しか正解できなかったのが左に示す問題でした。これは、新井紀子著『AI vs.教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社刊)で紹介されているものです。

この問題は「イメージ同定」問題と言って、文章と図形やグラフを比べて、内容が一致しているかどうかを認識する問題です。この種の問題は、さすがのAIもまったく歯が立たない問題です。つまりこのような問題に正確に答える力こそが、AIと差別化を図ることができる人間の優れた能力発揮部分になるの



メジャーリーグの選手のうち28%はアメリカ合衆国以外の出身の選手であるが、その出身国を見ると、ドミニカ共和国が最も多くおよそ35%である。

「問4」
次の文を読み、メジャーリーグ選手の出身国の内訳を表す図として適当なものをすべ
て選びなさい。

です。

ところが、この問題の中学生・高校生の正答率は、なんと中学生12%、高校生28%という衝撃的な結果でした。誤答の最大の原因は、問題文の中にある「以外の」や「のうち」を読み飛ばしたことによるものです。つまり、正確に文章を理解する力が不足したための不正解なのです。

番組の中で、林先生は「これからAIが日々進歩する中で、人間がAIに仕事を奪われないためには、AIの最も不得意な読解力を鍛える必要がある。」と講義をしめくくりました。ちょうど、番組で紹介されたこの本を読み終えたところだったので、とても興味深く番組を見ました。

本校の研究は「情報を活用し、表現する力をつける授業づくり」です。まさにAIに負けない人間の知能の独自性に磨きをかける領域にかかる研究内容です。莊原の子ども達に、中学校の教科書に書かれている内容が十分理解できる能力を育てるため、小学校段階では何を・どのように鍛える必要があるのか。研究最終年度を迎えた平成30年度がスタートする段階で再度考えてみたい大切なテーマです。

【取り上げた書籍】

◆ 新井紀子著『AI vs.教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社) 2018.02.15刊

